濤聲（とうせい）
No.33

江別市の学園生75名 岩内町を訪ねる

会長　佐々木幹夫（S32年卒）

少しでも ふるさとへの 恩返し （佐々木会長 企画・引率）

第34回交流会開会の挨拶で、会長が企画・引率する「岩内を訪ねる観光旅行計画」の発表がありました。

聚楽学園恒例の「秋の宿泊旅行」が、10月20日・21日の日程で行われました。今年は羊蹄山麓ニセコの温泉に一泊。75名の参加者は、元気に夜遅くまで多いに語り、笑い、楽しんでいました。

今回、新しい試みとして近隣町村を訪問するという企画をたて、翌朝大型バス2台で〝岩内町〟へ向けて出発しました。

道の駅では観光協会の肝いりでゆるキャラ「たら丸」君の歓迎を受け、ブームの「たら丸」君とカメラに収まって大はしゃぎ。



開会挨拶される佐々木会長


ゆるキャラ「たら丸」君が歓迎

近くの木田金次郎美術館を訪ね、数多くの名画に釘付けになり、ため息をつきながら熱心に鑑賞しました。屋上から目前の泊原発の建屋を眺め、実感として複雑な考えが各人あったのでは。

岩内山帰厚院で木造大仏像を拝観し、岩内町郷土館では館長による明解な語り調子で、岩内の歴史や文化を丁寧に解説していただき大好評でした。

このあと岩内産海鮮「にぎり寿し」に舌鼓をうち、海産物などの大好きな買物へと集り、賑やかにレジへ行列。

今回の宿泊旅行を通して岩内の歴史・災害・文化を見聞きする中で、各施設の素晴らしさ、清潔感、ガイドの熱心な説明ぶり、資料の豊富さに感嘆していました。岩内は豊かな町だと、皆さん感じたようです。

江別市は今年市制60年、岩内町は町制施行114年。時代の差を正に実感、歴史の重み・深さを体験されたのではないでしょうか。また、江別市の人口は12万人、岩内町の人口1万4千人。この差はあれ、時の流れの重厚さが残っていた岩内町の意外性を、改めて認識されたのではないでしょうか。

我が町ふるさとに何かでお役に立ちたい、そんな思いが今回の〝小さな旅〟へと行動させたのです。今回各施設、観光協会のご尽力に心から感謝申し上げ、結果意義のある旅を実行できたことを、安堵しております。



木田金次郎美術館前にて


昼食は清寿司本店で

聚楽学園
江別市教育委員会所轄後援の高齢者大学。8年制で平均年齢77歳。在籍生徒数444名。定例学習会や社会体験研修及び文化芸能発表会、宿泊旅行など多岐に亘る活動を続けている。
（佐々木会長が、副学園長を務めている。）

岩内高校 札幌同窓会のあゆみ

継続は力なり　会員426名

先輩諸兄の方々のご努力によって、良き郷土、学び舎に集う卒業生達が年に一度の大集会。

同窓生交流会は、他校に類を見ない長年に亘り衰退することなく34年もの歴史を刻む会として、持続している。

34年間の歴代会長及び事務局をご紹介する。

歴代会長

初代（S56～H6年）
佐藤真一郎氏（S20年卒）

2代（H7～16年）
時田健治郎氏（S26年卒）

3代（H17～25年）
丸山　淳士氏（S31年卒）

4代（H26年～）
佐々木幹夫氏（S32年卒）

事務局は、山本和男氏や蔭川博氏と当時の幹事を中心に運営されてきた。現在は櫟田晋壱氏へとバトンが渡り、情熱を傾けている。

発行所
岩内高校札幌同窓会
事務局
〒061-1373
恵庭市恵み野西4丁目8-6
電話・ファックス
0123-36-4677

第34回岩内高校札幌同窓会式次第

特別幹事開会宣言

代表 寺西　保（S47年卒）



第34回の"同窓会"の運営にあたり、多くの先輩諸兄の方々がこの日の再会を楽しみに待ちわびているとお見受けしていましたから、半年かけて同期に声をかけ盛り上がりのある演出を心がけ提案を聞きながら、一工夫ある進行に時間を費やしてきました。本日の開催にこぎつけ、この意義ある懇親会を迎えられたことに安堵と同期生幹事の労に感謝したいと思います。

来賓祝辞

生き生きウキウキ本同窓会に参加して

北海道岩内高等学校長　平田　嘉宏（新任）

札幌同窓会総会・交流会にお招きいただき、ありがとうございました。

当日、会場へ向かって地下通路を歩いていくと、お二人の男性が話しながら私の脇を足早に追い抜いていきました。会話の中身から、本交流会に出席される方だとわかりました。その足取りの軽さに、如何にこのお二人が同窓会を楽しみにされているかを実感し、私もますます楽しみになって会場に向かいました。

実際始まってみると、ご参加されている方々の表情は皆、実に生き生きとしており、楽しそうに至る所で会話がはずんでおりました。あまりに賑やかで司会の方がご苦労されておりましたので、交流会終了後に思わず「司会お疲れ様でした。ありがとうございました」とお礼を申し上げたほどです。そんな盛り上がりの中、私も多くの方々と楽しいお話をすることができ、皆様がそれぞれの業種等で大変ご活躍されてきたことや、この同窓会の素晴らしさ、諸先輩方の偉大さを実感させていただきました。中には、本校教職員のご親戚の方もいらっしゃって、大変驚きもいたしました。



岩内への帰りのバスの中でも話は尽きることなく、それどころか、岩内に到着してからも皆様とさらに親睦を深めることができ、大変思い出深い一日となりました。

こうした札幌同窓会の皆様のご期待に少しでも応えられるよう、岩内高校のため微力ながら頑張ってまいる所存でございますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

（本年4月着任）

円滑な進行に一役

和田　義一（S47年卒）

毎年のことながら、懇親会進行の大切な役割に司会を司る人がいる。

幾多の経験と場数を踏んだ実績。何といっても人前で話ができ、また上手にコトを運ぶ話術というものは、それなりの体験と自信が必要なのである。

この同窓会では担当幹事の中から選ばれた司会役の人達が、正に毎年上手にこなしておられる。一部総会の議長格の発言、進行も続く中で、和田氏は見事にクリアされていた。

（編集局）



進行係　和田　義一（S47年卒）

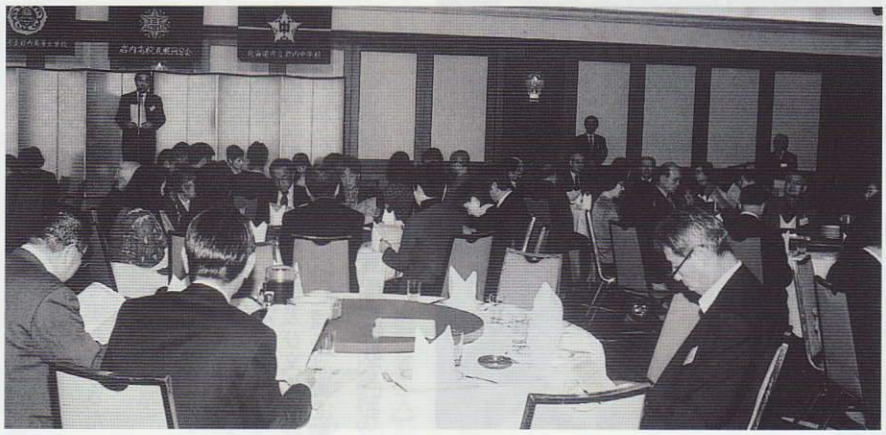
開会の祝杯

岩内町長　上岡　雄司（S44年卒）



祝杯のご発声をいただいた上岡町長

●お被楽喜の乾杯は岩内高校三浦教頭のご発声でした。



笑い声と語り声が賑やかに響く

同窓会 ゴルフ同好会・パークゴルフ交流会

サークルの輪を広げたい

平成26年度パークゴルフ交流会の報告



運営委員長　岡崎　嘉彦（S30年卒）

パークゴルフの交流会が平成24年から年5回（6月と10月は大会、7～9月は例会）となりましたが、8月23日に予定されていた例会が大雨のため残念ながら中止となり、今年は4回の開催となりました。来年は天候に恵まれ5回開催できることを願っています。

参加者全員に優勝や入賞のチャンスが得られるように、過去5試合の平均打数と120打の差がハンディになりプラス15打～0～マイナス15打が付与されています。

▼第34回交流会　山根園　6月22日

小林　力さん（S34年卒）がマイナス8のハンディが物をいい114打で初優勝を果たしました。実力者の工藤　章さん（S34年卒）が115打で準優勝となり、3位は同じ115打で若い（？）濱野保雄さん（S43年卒）が、4位はベテランの岡崎嘉彦（S30年卒）が116打で続きました。114～116打の2打の間に4人が入る接戦でした。

▼第35回交流会　王子ゴルフ　7月29日

グロス110打の福藤　繁さん（S40年卒）がプラス9のハンディを持ちながら119打で優勝しました。準優勝は谷口　豊さん（S35年卒）が121打で続きました。3・4位には前回に続き濱野さん、岡崎が入りました。

▼第36回交流会　福移の杜　9月26日

ハンディマイナス3のダークホース中上外喜男さん（S31年卒）が110打で優勝を果たしました。前回に続き谷口　豊さんが111打で準優勝しました。3位には大先輩の栗林守正さん（S25年卒）が111打で入りました。4位には濱野さんが114打で3回連続上位入賞を果たしました。

▼第37回交流会　王子ゴルフ　10月13日

実力者でハンディプラス15の佐藤　修さん（S43年卒）が119打で優勝。同じくハンディプラス15の竹内秀雄さん（S37年卒）が123打で準優勝を果たしました。3位にはハンディプラス14の福藤　繁さんが入りました。4位には大中英敬さん（S40年卒）が125打と健闘しました。



前列左から:福藤・大中・谷口・岡崎・栗林
中列左から:小林・工藤・水嶋・花岡
後列左から:佐藤・竹内・濱野

成績表

〔第34回ＰＧ交流会の成績〕

順位	氏名	卒年次	スコア	ハンディ
1位	小林　力	33	114	(-8)
2位	工藤　章	34	115	(+7)
3位	濱野　保雄	43	115	(0)
4位	岡崎　嘉彦	30	116	(+6)
5位	谷口　豊	35	119	(-1)
6位	竹内　秀雄	37	120	(+15)
7位	山本　勇治	31	121	(+6)

〔第35回ＰＧ交流会の成績〕

順位	氏名	卒年次	スコア	ハンディ
1位	福藤　繁	40	119	(+9)
2位	谷口　豊	35	121	(0)
3位	濱野　保雄	43	123	(+3)
4位	岡崎　嘉彦	30	124	(+8)
5位	平木　武司	34	124	(0)
6位	花岡美保子	30	125	(-13)
7位	竹内　秀雄	37	130	(+15)

〔第36回ＰＧ交流会の成績〕

順位	氏名	卒年次	スコア	ハンディ
1位	中上外喜男	31	110	(-3)
2位	谷口　豊	35	111	(+4)
3位	栗林　守正	25	111	(-7)
4位	濱野　保雄	43	114	(+6)
5位	平木　武司	34	114	(+1)
6位	竹内　秀雄	37	115	(+15)
7位	福藤　繁	40	116	(+14)

〔第37回ＰＧ交流会の成績〕

順位	氏名	卒年次	スコア	ハンディ
1位	佐藤　修	43	119	(+15)
2位	竹内　秀雄	37	123	(+15)
3位	福藤　繁	40	125	(+14)
4位	大中　英敬	40	125	(-1)
5位	花岡美保子	30	125	(-13)
6位	岡崎　嘉彦	30	126	(+10)
7位	栗林　守正	25	126	(-4)

次の方々も交流会に参加しています。
水嶋　勝蔵（S21年卒）
松川　佳子（S28年卒）

◎パークゴルフをしている方は、楽しい同窓会のパークゴルフ交流会に参加して、一緒に楽しみませんか？
申込先：岡崎　嘉彦　832・3712
花岡美保子　582・0504

岩内高校札幌同窓会 第15回ゴルフ交流会の報告



幹事長　藤嶋　正紀（S43年卒）

同窓会の皆さま、お元気ですか？岩内高校卒業生の親睦を目的にスタートしたゴルフ交流会も、今年で15回目を迎えました。

今年は、幹事の体調が悪く開催を躊躇しておりましたが、急遽9月中旬に実施することにいたしました。短い準備期間で大急ぎで案内をさせていただきましたが、少数精鋭といいますか、3組11名の岩内高校同窓生が集まってくれました。ありがとうございました。

昨年と同じように、異常気象で全国的に「豪雨」による被害が続出し、北海道でも長雨と局所的豪雨による被害が発生したことは記憶に新しいところです。雨の影響を懸念しておりましたが、当日は天気に恵まれ、無事プレーを終了することができました。

プレー終了後、クラブハウスに戻り、岩内および近郊の物産を賞品に表彰式を行いました。思う存分打ち込んでいただくため、カットなしのダブルペリヤ方式で順位を決めましたが、結果は次の通りです。順位賞の他にドラコン、ニアピン、大波・小波・平和、特別賞等を設けておりましたが、結果的に賞品は参加していただいた皆さんに概ね均等に行き渡りました。

また、昨年は9月下旬の開催ということで午前スタートにせざるを得ませんでしたので、今年は少し早めて午後スタートにしてみましたが、やはり現役世代の参加が難しかったようでした。例年、この場でお知らせしていることですが、ゴルフ人口の減少と参加者の高齢化、平日のプレーがしにくい現役世代の参加が可能な交流会に進化させていく必要があること等のため、日程、コース選定に苦慮しているところです。結局、①札幌近郊、②カートによるセルフプレーが可能、③リーズナブルな料金、等を条件にコースを選定し、予約可能な日程を設定することになります。この交流会を楽しく継続していくためにどうすればよいのか、皆さんの知恵と情報をお寄せください。

【開催要領】
1.日　時　平成26年9月19日（金）
　12時05分スタート
2.場　所　ゴールド札幌カントリークラブ
3.競技方法　ダブルペリヤ方式による個人戦
4.競技結果
　優　勝　芝西　新也（S40年卒）
　準優勝　多久和　清（S34年卒）
　3　位　橋野　茂（S42年卒）
　4　位　能登　潤明（S40年卒）
　5　位　濱岸　敬治（S44年卒）



左から:橋野　茂・多久和清・芝西新也・能登潤明・濱岸敬治



参加者全員で

〈巻頭言〉 神の手 佛の心

岩中二期生会　会長
藤井　昭吾（S21年卒）



「かすべ」もいよいよ最終の時を迎えた。

よくまあ半世紀以上もつづいたものである。創刊期の「かすべ」は第6号まで殆んどが懐かしい恩師の記事でつくづく有難い貴重な財産だと思うのである。読む度に先生方の顔が浮かび、声が響いてくる。オットのラッパ、大八車の音、モッコ担ぎ、港に入った汽船の汽笛、ニシン場、田植え、草取り…と作業で終わった中学時代を次々と想い出すのである。

第6号以降も先生方の名は出るが徐々に安達、山岸、阿部昭二、寺崎、堀川、馬場、今泉、戸巻、水嶋、冨田、小笠原、黒田…と仲間の原稿が増えていった。

佐渡、盛岡と二度にわたる修学旅行は圧巻であった。おけさの音で鳥井先生にもお会い出来たし、盛岡では「駒龍」で美人の芸者を二人もあげて華麗な宴を楽しませて戴いた。

石井・丸山両先生の喜寿の祝い、泊のもいわ荘、小樽の展望閣、屋形船…と数え上げたらきりが無いほど楽しませてもらった。

こんなに楽しい仲間との交流をこんなにも長く続けられたのは、発足時の10数年寒い冬の夜に、ガリ版に向かい冷たい鉄筆を走らせて「かすべ」を何十冊も印刷し、仲間に発送してくれた瀬川さんあればこそで、どんなに感謝してもし過ぎることはない。正に神、佛のような愛が無ければ出来る仕事ではない。

「かすべ」の命名者としては物故者氏名を見る度に、こんな仲間達と過ごせたのだと幸いに感じているのである。

旧中二期生会（S21年卒）会誌「かすべ」通巻44号にて終刊を惜しむ

札幌同窓会　初代会長
佐藤真一郎（S21年卒）



旧制中学二期生会が発行していた「かすべ」が本年号で惜しくも終刊することになった。同会は昭和21年の卒業であるが、同期会として独自に毎年会誌を発行したのは他に例がなく関係者の熱意、努力が高く評価されていた。会員の高齢化、減少によってやむなく終刊を迎えたのであるが、讃辞とこれを惜しむ声が高い。

その前に旧中創立までの歴史と社会情勢と背景に触れてみたい。

大正10年（一九二一）、道は中学校15校、高等女学校9校、実業学校（商業、工業、農業）15校、師範学校3校の増設を計画したのであるが、後志管内では倶知安と余市に中学校、岩内には高等女学校を建設することを発表した。

これに対して岩内が猛反発し、「高等女学校はいらぬ、中学でなければ駄目である」と頑なまでに反対運動をした。結果は道は中学・高等女学校共にこれを認めず、岩内を建設地から外してしまった。岩内は虻蜂取らずの結果に終わった。

このため札幌・小樽等に寄宿進学する人は二・三人に限られ、あとは倶知安中学校に汽車通学をせざるを得なくなった。その数は数十人に達した。親も子も多大な負担を強いられた。

一番大変であったのは母親で岩内駅を朝一番の汽車（6時台）に乗せるためには、早朝から起きて弁当を作らなければならなかった。子ども達は子ども達で岩内駅から小沢駅まで行き、ここで函館本線に乗換え、倶知安駅で下車、学校に駆け込むという生活を強いられた。男子の多い家庭ではこれが何年も続くのであった。

それから19年後、ついに親も我慢ができなくなって町有志による中学建設期成会が発足・運動して、ようやく昭和16年（一九四一）、小学校の一部を仮校舎として120名の生徒を選抜して町立岩内中学校が発足した。

従って二期生は昭和17年の入学、昭和21年の卒業。学校は昭和20年に町立から道立に移管された。

ところで、昭和16年といえば戦争の真っ最中で、町には金はなく人手もなくてゼロからのスタートであった。学校は始まったが、男性は戦争に駆り出され残るのは女性・子ども・老人ばかりであったから、勤労動員という名の労働が中学生に降りかかってきた。勉強どころではなく、その働き先も多種に亘った。農作業応援（日帰りと農家泊まり込み）、飛行場建設（八雲）、港の石炭積み込み作業、国富鉱山、冬山の造材、缶詰工場、鰊の加工場、海産物加工所等々「ただ一言戦争に勝つために」従わざるを得ない状況であった。

それに加えて自分の学校建設用地の地均し作業を命ぜられたから勉強どころではない。当時機械力などゼロ。鍬とモッコに土を入れて棒を通し、前後二人で土を下の方に運び、倉島牧場の方向に向かって土を砕くのであるが、遅々として進まない。

現場に行くと先生が「今日はここまで」と縄を張って取りかかる。そこまで到達しなければ帰して貰えない。時には予定より早く到達したら校長が追加分として縄を動かそうとして、流石に引率の教師がやめさせる一幕もあった。

この整地作業は一期から三期くらいまでの生徒がさせられたが特に一期・二期生が重圧を受けた。現校舎の建っている土地には、当時の生徒の汗と涙が染み込んでいるのである。

そのうち生徒に軍隊志願を勧奨することも加わって、一期生は卒業時半数の60人に減っていたから、仕事が進む訳もなかった。それでも生徒は文句も言えず、どんな学校が建つのか、自分たちは入れるのだろうか、と思いながら過ごすよりなかった。

中学校に入ったのに、これでは土方学校ではないかと自嘲する者もいたが、無理もなかった。

このような辛い苦しい体験をしながらの共同生活。同じ釜の飯を食い、苦楽を分かち合って「仲間意識」が強く育ったのであろう。

二期生会「かすべ」もその現れとして昭和37年創刊、52年間一時休刊もあったが通巻44号まで継続したことは、賞讃に値するものである。

この間の会長は、初代　山岸正己・二代目堀川俊彦・三代目　藤井昭吾の三氏。事務局長兼「かすべ」編集制作は瀬川二夫氏が一人で担当され会員から感謝の声が上がっている。

内容は多数の絵、及び写真。総会の記録、会員の動向、各地短信。文芸欄では多くの人の随筆などを掲載。終刊号では各年「かすべ」の全目次、入学時の名簿、物故者の名簿も掲載した。

会ではこの他に「恩師訪問佐渡旅行」や「岩手県バス修学旅行」なども行われた。今後は、昼食会に出席できる人たちで続けていきたいとのことであった。

かくて平成26年4月に惜しまれながら終刊となった。この時点での二期生は次の方々である（敬称略）。本当にご苦労様でした。

石井勝己・岩城礼三・今泉　武・加賀正光・川田幸一・桜井正蔵・瀬川二夫・田中日一・戸巻昭三・永井清保・中山　裕・橋口哲郎・藤井昭吾・本多　司・牧口光則・水嶋勝蔵・森井甲治・簗瀬真実　以上18名

〈本稿をもって最終稿となります〉

北海道の風景を描き続けるはり絵作家

藤倉　英幸（S42年卒）



アトリエで制作に励む藤倉さん。朝から晩まで単調な作業を繰り返していると、ふと旅に出たくなるという

生きる

農村に漁村、都会に離島、そして大自然―。主に道内のさまざまな春夏秋冬を描いてきた。独自に編み出した「はり絵」という技法。素朴な味わいが漂う作品は、見る者を郷愁の世界へといざなう。

はり絵は切った紙を貼り合わせて制作するが、切り絵と違いカッターをほとんど使わず、紙に定規を当ててひきちぎるように切り取る。切り口が鋭利でない分、自然な輪郭が生まれる。

まず現地で撮った写真と受けた印象を基に下絵を描く。次にそれに合わせて色洋紙を切り、たくさんのパーツを作る。パーツに色を付け、背景から順に貼り付けていく。こうして切り絵でもなく、筆などを使った絵画でもない独特の絵が誕生する。

「刃物なら正確に切れるけど、ちぎれば不正確というか偶然の形を生む。だからほどほどの単純化と、ほどほどのデフォルメ（変形）ができるんです」

40歳のころ、それまでの切り絵で風景を表現することに違和感を持ち始めた。「過度に情感を押し付けていないだろうか。風景に適した手法なのだろうかと。その時出会ったのが、簡略化された色で対象をとらえる斎藤清の木版画でした」

日常は至って単調だ。朝9時ごろから夜7時ごろまで自宅隣のアトリエにこもり、昼食も家から運んでもらう。ラジオのFM放送を聞きながら作業し、時折、コーヒーを飲み、たばこに火を付ける。

この繰り返しの中から、およそ2千点の作品を世に送り出してきた。作品はすべて大判のフィルムで保存し、デジタルデータにはしていない。

「デジカメは使っているけど、パソコンも携帯もない。正直言えば使えないんです。もう開き直るしかない。絵を描くということは絶対的にアナログな作業なんだからと」

ある日、家の前を通った人が「ここは絵描き屋さんの家」と言ったのが聞こえた。「絵描き」ではない。なるほどと思った。

「絵描きだと自分勝手な絵ばかり描いているようで。絵描き屋と呼ばれて、独り善がりでないような、どこか人の役に立っている絵を描いているような、すごく褒められた気持ちになりました。名刺の肩書きにしてもいいくらいです」

これからも同じような日常を続けるつもりだ。

「65歳までに北海道53景をやろうとして63景になった。例えば70歳までに羊蹄山の36景をやろうとか、まだ決定じゃないけど考えています」

北海道新聞　9月30日（火）夕刊より

岩内復興の原動力

岩内町郷土館館長　坂井　弘治（S33年卒）

今年は、岩内町の運命を大きく変えた昭和29年9月26日の「岩内大火」から60年になります。焼失家屋3300戸、船舶（動力船のみ）被害120隻、死者35名、行方不明3名、罹災人数1722人の大災害をもたらした台風15号は、別名「洞爺丸台風」といわれ、この方が一般化しています。それはご承知のようにこの台風が青函連絡船「洞爺丸」他、青函貨物船4隻を転覆させ、洞爺丸は死者1029人、行方不明83人、貨物船4隻を含めると死者・行方不明1562人の人命を奪ったからです。当然、当時のマスコミといっても新聞・ラジオですが、この洞爺丸遭難事故を大々的に取り上げました。岩内大火の記事は隅に追いやられ、やがて10月中旬に紙面から消えています。

このような中で、岩内再起不能の噂が流れます。というのは、この年の1月29日「日本海暴風雪災害」と名付けられた暴風雪で、岩内港の漁船73隻が強風に煽られ、港外に流されて大浜海岸に打ち上げられ、沈没13隻、大中小破60隻という災害を受けたのです。

その災害からわずか8ヶ月後に、動力船のみでも焼失・沈没69隻、大中小破51隻、合計120隻の大被害をこうむったのです。岩内の基幹産業である漁業が1年のうちに二度にわたって大災害に見舞われたのです。おまけに市街地は全滅です。「岩内再起不能」という言葉が出てきても不思議はなかったのです。

しかし、岩内は1年後には、ほぼ従来通りの町並みを復活させるという奇跡の復興を成し遂げます。その復興の原動力の第一は、昭和27年、近代的都市作りのため都市計画委員会（委員長本間哲衛）が組織され、29年までの3年間で航空写真の撮影と600分の1の現況図を作り上げていたことでした。

大正9年、国は各地方自治体に「近代的都市計画作り」を奨励します。しかし、その経費に関する補助金はわずか2割でした。仮に計画案ができたとしても、その実行には巨額の金と時間が必要で、それは不可能なことでした。まさに近代的都市計画案は絵に描いたモチでした。そのモチを岩内は作り始めていたのです。

原動力の第二は、この都市計画委員会の成果をもとにして、寝食を忘れて近代的防災都市岩内を作るために邁進した北海道庁土木部職員の奮戦努力です。彼らは大火後数日の内に岩内に入り、岩内神社の一室に宿泊しながら役場町長室を事務所として「区画割り」作業に入りました。



業務内容は、道路幅の拡大、新道路や新設される16の児童公園などの測量・設置、それにともなう減歩や換地などでした。この中で困難を極めたのは、減歩と換地です。公園や道路拡張のために自分の土地が削られるのです。当然反発が起こります。抗議の町民が役場はもとより神社まで押しかけて来ます。経過の詳述は避けますが、雪が降る前になんとか狭い我が家であっても家を建てたい町民と、将来の岩内を見据えた防災都市作りのために努力する職員との間には様々な対立がありました。そんな中で「区画割り」は11月中旬にはなんとか終わります。街のあちこちから槌音が聞こえ始めます。

その建設の槌音が響く中で出漁したスケトウタラ（以下スケソ）漁の豊漁が原動力の第三です。11月7日午前6時、異例の山本町長の万歳の声に送られてスケソ漁船100余隻が出航します。その多くは古平・美国・寿都、遠くは北見の常呂漁港から購入した中古船や借船でした。やがてスケソを満載した船が次々と帰って来ます。浜は豊漁の喜びに沸き立ちます。29年11月から30年2月にかけてのスケソ漁獲高は、当時の金額で約3億6千万円（現在の金額にして約82億円。昭和29年の高卒国家公務員給料5千9百円、平成25年の14万円で比較）に上がったのです。

しかし、残念ながら犠牲者が出ました。道庁土木課職員明石　実氏が過労で倒れ、その後本庁に戻るが亡くなってしまったのです。大浜にある「あかしや公園」はこの明石氏を偲んで命名したものです。また、これも大浜にある「きよみず公園」「みずしま公園」はこの事業の責任者土木部課長の清水武夫氏、主任技師水島八郎氏を記念しています。

都市計画作りの基礎となる「現況図」がすでにでき上がっていたこと、道庁土木職員17名（現地採用7名含む）の努力、そしてスケソの豊漁、この三つが岩内人の不撓不屈の精神と響き合って、岩内は廃墟から不死鳥のように蘇ったのです。



第34回 総会・交流会

平成26年10月3日(金)札幌全日空ホテル （130名参加）


佐々木 幹夫会長



上岡 雄司岩内町・町長祝杯



寺西 保特別幹事代表


全景


全景



平田 嘉宏校長先生


和田 義一司会進行



全景



丸山 淳士顧問・前会長



藤井 昭吾先生



平田 嘉宏校長先生



三浦 隆詔教頭先生



佐藤 毅先生



福嶋 尚之岩内高校同窓会・会長



三浦 富彦前岩内高校同窓会・会長



上岡 雄司岩内町・町長



村田 憲俊北海道議会議員



坂井 弘治岩内町郷土館・館長